祝

岸和田市市制施行100周年

SPECIAL INTERVIEW

INTERVIEW 01

コシノ三姉妹（こしのさんしまい）

コシノミチコさん × **コシノジュンコ**さん × **コシノヒロコ**さん

昭和18年（1943）生まれ。1973年単身で渡英後、日英でコレクションに参加。ロンドンを拠点に活動し、斬新なクリエーションは年齢やジェンダーの枠を超え支持されている。代表作は“80年代ストリートカルチャーの象徴”として、王立V&A博物館にも納められている。日本人初の英国ファッション協会正式会員。ロンドンにおいて自ら寿司店MICHIKO SUSHINOもプロデュース。

昭和14年（1939）生まれ。文化服装学院在学中、新人デザイナーの登竜門「装苑賞」を最年少の19歳で受賞。1978年初参加したパリ・コレクションをはじめ、北京で中国最大のファッションショー、ベトナムでは日本人初のショー、キューバでも世界初の国外デザイナーによるショーを開催。文化功労者、2025年日本国際博覧会協会シニアアドバイザー。2021年フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受章。

昭和12年（1937）生まれ。文化服装学院在学中よりキャリアを重ね、東京、パリ、ローマ、上海、ソウル、台北などでコレクションを発表。近年はアーティストとしても精力的に活動し、2013年KHギャラリー芦屋をオープン。2021年兵庫県立美術館で「コシノヒロコ展」を大々的に開催した。1997年第15回毎日ファッション大賞、2001年大阪芸術賞受賞。

大正2年生まれの母と岸和田で過ごした子ども時代

「このたびは岸和田市市制施行100周年、おめでとうございます」

HIROKO（以下**H**）／JUNKO（以下**J**）／MICHIKO（以下**M**）

H　お母ちゃん（小篠綾子さん）は大正2年（1913）生まれ。大正11年（1922）に岸和田市が生まれたならお母ちゃんは9歳年上。コシノ生家をおじいちゃんが借りたのは、その前…、築100年以上やわ（笑）。

J　戦時中は地下に防空壕があって、染み出す水が多くてそれを汲み上げたことを覚えてるわ。

M　小さかったので覚えていない…。

H　食料を手に入れるため手持ちの反物（たんもの）を下着にして売ってたな。暮らしは苦しかった。それでもお母ちゃんは「あんたは才能を伸ばし！」と言うて、大阪市内の文具店で高価な油彩絵の具セットを買ってくれた。この”才能“という言葉が今でも励みになってるわ。

J　やかましい三姉妹を少しでも職場（コシノ生家）から追っ払うため、日本舞踊や三味線、書道など多くの習い事をさせてもらった…。今ではホンマ感謝してる。

M　私はハナから相手にされてへんかった。スポーツ（テニス）ではナンバーワンでも、教室に入るとビリ。”才能“がないと思われたんやな。

H　さすがになぁ…、真っ黒に日焼けして、あんた猿みたいやった。

J　テニスで汚れた靴下を何本も欄間（らんま）で乾かして。

M　短大卒業直前、全日本学生テニス選手権大会で優勝して石川県の会場から帰ったら、誉められもせず「あんたどこ行ってたんよ？ 家にも帰らんと！」て怒られたわ。

H　私は寺田甚吉さん（※1）に「ぜひに」といわれて、お屋敷で三味線を披露したんを覚えてるわ。習い事も身についたら強い。

撮影ロケ地：コシノギャラリー（アヤコ食堂2階）

私らにとって岸和田は「国籍」みたいなもの

H　何といっても自分の出身は岸和田。海外にいるときも国籍は「日本」っていうよりも「岸和田」。これは誇りやね。

J　そう。自分の中では岸和田ことばがスタンダードで、今でも日本語は岸和田ことば。要するに、出身地は日本であることよりも岸和田という思いが優先してる。

H　事務所でスタッフと話してても、みんな標準語と岸和田ことばを使い分けてる。私に感化されてるねん（笑）。来客者はスタッフ間の会話になると「…？？」。つまり、何語かわかっていない。

J　そう。「しちゃって」とか「食べり」とか岸和田ことばが耳に居ついて、愛着以上のものがある。お母ちゃんが東京に来たときは「何語を話しているの？」と友だちからよく聞かれたわ。「宇宙語？」とからかわれた。私は上京した折、無口でしゃべれなかった…、標準語についていけなくて。

M　ロンドンで日本のことを聞かれたら、「日本」イコール「岸和田」として答えてるわ。私は英語と岸和田ことば、2カ国語で会話している。ロンドンは地域色が濃くて、自分の住む地域が最重要。それと一緒やで。私はもう関空着いたら、まず岸和田！ 打合せがあったら大阪市内にも行くけど、そんなんどうでもいい、とにかく岸和田やわ。

J　地域文化は優先ね。世界的に。

M　ロンドンの人にとって日本は同じ島国でも自然災害の多い国という印象が強くて。そやけど岸和田の数百年続く城下町、城、そして空の面積の広さ（都市部に対して）を伝えると関心を持ってくれる。海が近いことも。広く知られていないことが残念やわ。これは岸和田の人、ひとりひとりが意識してほしい気がするなあ。

私たちの原点である岸和田市 三姉妹は100年を元気に走行中！

変わらない岸和田、変わっていくだろう岸和田

H　落ち着いたとはいえコロナ禍や、海外の紛争問題、円安とかで、消費や流通、サービスが変化してるな。うちらも大変やわ。岸和田はこの先どこへ向かうんやろ？ お母ちゃんおったら、どう言うと思う？

J　100年経ってもお城や城下町、商店街はもちろん、だんじり祭は残っていて欲しい、ってきっと言うわ。海外から評価されている岸和田のいい個性が地元であまり認識されていない気がする。それが課題よ。

H　私はメタバース（※2）でのビジネスを始めた。性別や国籍・年齢問わずに交流したり新しいライフスタイルを楽しんだりと、時代は進んでる。もうすでに店でモノを売るだけの世界ではなくなってる。岸和田というまちも、デジタル化も含めてそんな進化ができるんちゃう？

J　市制施行100周年の節目に、いろんなイベントがあると思うけど、もうちょっと長い目で見ることが大事かもしれへんね。人流も変わっていくし。

M　100年に縛られず、三姉妹でできることをしてみぃひん？

H　岸和田へのご恩返しになるしね。持続性のある試みは大事やね。

M　高校生とか、若い子と協力して、一緒に制作するとか…。

J　若い子らの感性や才能を、いくつになっても感じていたい。岸和田をこの先も盛り上げるために、そんな夢を持ち続けていきたいね。

コシノギャラリー（アヤコ食堂2階）は現存するコシノ生家（元コシノ洋装店）であり、母・小篠綾子さんを偲び、三姉妹のヒストリーを伝える展示が常設されている

※1　寺田財閥の創始者・甚与茂（→P13）の長男
※2　ネットワーク上に置かれた、仮想の生活やサービス活動が行える三次元のバーチャル空間

ウチの「宝」はここに全部ある…糸子のセリフは、まさに岸和田を示すんやわ

撮影ロケ地：
コシノギャラリー、五風荘、
五軒屋町地車小屋

INTERVIEW02

尾野真千子さん

おのまちこ

PROFILE／奈良県五條市出身、昭和56年(1981)生まれ。映画監督・河瀬直美氏の目にとまり、平成9年(1997)『萌の朱雀』で主演デビューしシンガポール国際映画祭主演女優賞を受賞、NHK連続テレビ小説『カーネーション』で東京ドラマアウォード2012主演女優賞受賞。ほかにも、日本アカデミー賞優秀主演女優賞や優秀助演女優賞、キネマ旬報ベスト・テン主演女優賞など多数受賞。

『カーネーション』。私は一年前のことのよう…

だんじりは太秦（うずまさ）でのロケで初めて見ました。2階から眺める設定で、なんとカッコよい祭りなのかと感動しました。綱を曳く方々の活気も。

今日はNHK大阪放送局・岸和田市主催『おかえり糸子！カーネーションファンミーティング』のロケの撮影で、久しぶりに岸和田に来たんやけど、大勢の方々が「糸ちゃん！」と声をかけてくれる。

太秦の撮影の後、五風荘、弥栄神社とロケが続いたなかで、ようやく岸和田の気質のようなものを意識するようになりました。

そやから今日は、一日岸和田警察署長をやった当時のことを思い出しました。機嫌よく敬礼して商店街を歩いている途中、振り返ると恐ろしいほどの人だかり。うれしくて泣いてしまったんですけど、この岸和田の活気には驚かされます。

一番印象に残っているのは、番組宣伝の撮影で本物の9月祭礼を見せてもらったとき。太秦での撮影では感じることのできなかった熱気、勢いを強く感じたわ。この祭りを中心に、このまちがあるという意味が理解できた瞬間ですね。いろいろな土地をロケなどで訪問するけど、岸和田市内各地の活気や元気のよさはよそにはない。そのことを思い出すと、つい一年前の出来事のように感じます。

私が演じたお母ちゃん（小篠綾子さん／糸子のモデル）のプロフィールを見ると戦前、戦後、高度成長期、不況、バブル景気と時代に応じた活躍で、岸和田市100年の歴史そのものもの。『カーネーション』もまさにそう。

100年前って言うたら…大正11年（1922）。ドラマに最初に出てくる糸子がちょうど小学校低学年、9歳のときやし、シンクロしますね。

『カーネーション』で着座した五風荘の広間にて。五軒屋町ではだんじりと小屋で再会。会話は普通に岸和田ことばに切り替わっていた

活気、伝統を守ろう…岸和田愛は繋がる!?

糸子のセリフを借りると「ウチの宝はここに全部ある」（※1）から、今も生きているその「宝」、祭りや岸和田の気質、活気や伝統、人々の暮らしを大切に守り続けてほしい。岸和田愛ですね。もちろん『カーネーション』も100年、200年と語り継がれていってほしいです（照笑）。

※1 ドラマ127回、尾野真千子最後の登場回より

撮影ロケ地：
岸和田市立図書館

いきいきとした岸和田の図書館より一層、広がってくれたら…

INTERVIEW03

緑川聖司さん

みどりかわせいじ

PROFILE／岸和田市出身。平成15年(2003)『晴れた日は図書館へいこう』で、第1回日本児童文学者協会長編児童文学新人賞の佳作となりデビュー。「本の怪談」シリーズ、「怪談収集家　山岸良介」シリーズなど著作多数。日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会会員。

『晴れた日は図書館へいこう』は岸和田が舞台！

本好きが高じて作家を志望した僕は、就職浪人時代、ここ岸和田市立図書館に足しげく通い、本を読み漁（あさ）っていました。山手の自宅から図書館のある城下町まで、車からの風景が気持ちよかったですね。大阪市内に比べると空も広いし。

デビュー作の『晴れた日は図書館へいこう』の舞台は架空の町ですが、作中に出てくる図書館は、建物の造りや本の並び、司書さんの雰囲気など、この市立図書館がモデルになっています。そこに、推理小説やショートショートで培った自分のノウハウをプラスしました。

現在、僕は主に児童文庫という分野で書いています。これは「大人からすすめられる本」というより、子どもが「自分のおこづかいで買う本」。最近は学校の「朝の読書活動」をきっかけに本を読む子どもが増えているので、短い時間でも手軽に読めるものとして、子どもたちが自分で選んでくれることがうれしいです。

岸和田の図書館は“開かれた図書館”だと思います。図書館では本を借りるだけではなく、さまざまな企画もされているので、世代の異なるいろいろな立場の人と交流するきっかけにしてほしいですね。そんないきいきとした岸和田の図書館のような施設が、今以上に広がってほしいと思います。

現在在住の大阪市では、お子さんが自然にふれていないと感じるとか。岸和田でいろんな体験をさせたいとのことなので、ばったり図書館でお会いできるかも？

INTERVIEW04

お〜い！久馬さん

お〜いきゅうま

情に厚い岸和田を飛び出して吉本興業への道をめざした日

撮影ロケ地：
岸和田市立春木中学校

PROFILE／昭和47年(1972)生まれ。岸和田市出身。お笑いタレント、脚本家、漫才作家。舞台演出も手掛ける。作家として本名である「久馬 歩」で参加することも。お笑いユニット『ザ・プラン9』のリーダーとしてはもちろん、今後の活躍にも期待。

登校する際、オカンに「吉本行くわ」と告げた

岸和田時代は、高校を卒業するまで、やんちゃもせず、ダイエーやニチイで遊ぶようなおとなしめの子でした。

明確な将来像がないまま高校3年生になり、周りが進学・就職先を決めていくのを不思議に思ってました。表向きは「経理系の著名専門学校へ行く」と言ってましたが、ある朝の登校時、唐突に「吉本行くわ」と玄関先で母親に告げました。

そこからはもう大騒ぎ。NSC（吉本総合芸能学院）は岸和田市立産業高校でも前代未聞の進学先。親は呼び出され、いろいろと説得されましたが…。あれから30年、よく続けられたと思います。

令和4年（2022）1月に芸歴30周年記念公演を浪切ホールで行い、同級生が集まってくれました。岸和田には厚い情があります。芸人になって初めて大型公演を観覧してくれた親からも誉めてもらい、かけがえのない思い出になりました。

厚い情だけでなく、城下町らしさとか、商店街、食の思い出だとか、ガッチョや祭りのときの冷やしあめとか…、そういう「岸和田らしさ」が、よそにはない。人を惹きつける深い魅力のあるまちだと思いますね。

地元で精密部品の整理などのバイト経験も。業務を教えてくれた賢そうな先輩と、NSCの面接会場で居合わせたことはまさにお笑い